



「あなた、本当にいいの？」

オンザロックのグラスを差し出しながら、清水紗季子は夫の恒彦に聞いた。

ついさっき家を訪ねてきたのは、あの夜に血を吐いて運ばれていった少年であったのだ。

その事も紗季子を驚かせたが、夫がまるで予期していたかのように彼を招き入れた事が、彼女には驚きと同時に不審でもあった。

「お前には話していなかったが、今夜彼がここを訪ねてくるのは予定通りの事なんだ」

「予定通りですって？」

「ああ。この間見舞いに行った時、加夏子のリハビリ担当に相談を受けたんだ。お前も会った事があるだろう。トレーナーの久我さんだよ」

酒のつまみを皿に盛り付けていた紗季子の背がぴくりと動いた。

「ん？ どうかしたか」

「いえ、別になにも」

表情を変えず、紗季子は恒彦の前に皿を置いた。

「彼とじっくり話したんだ。加夏子が何故、あんな風になってしまったのか。何故今、あの子の暴発が収まりつつあるのか」

「それであのひと…久我さんは何て？」

「彼もあの少年から聞いたのだそうだが、要は加夏子が自分で恐怖に打ち勝ったって事らしい。その代わり他人への強烈な不審を抱え込んでしまったと。あの夜、堀川というあの少年が吐血したのは加夏子の『攻撃』をモロに受けてしまったのが原因らしい。そしてそれは加夏子の誤解から生じていると。それを解かねば、根本的な解決にはならないと彼は言っていた」

「でも今は良くなっているのじゃありません？ 確かに少し元気が無いみたいだけど、嘔みついたり引っ掻いたり、殴ったりもしないじゃないですか」

「あの子が心を開くきっかけになったのは、同じ入院患者の女の子と出会ったかららしい。だがな、その子もあの少年と同じような力を持っているようなんだ。何と言ったかな…」

「サイコイン」

「それだ。加夏子の心の根っこの部分を治すには、どうしてもその力が必要だと。そしてそれは、あの彼でなくてはならないと、そう言っていたんだ。私はその言葉を信じた」

「そうですか。あのひとがそんなことを」

ほっそりとした指で胸元を包むようにした紗季子が、仰ぐように二階を見た。

加夏子と殉が向かい合っているであろう部屋を。

◇

「みーちゃんに会ったの。パパやママが迎えにきてくれるのを待ってたとき」

加夏子がようやく口を開いた。

殉は部屋に入ったときのまま、戸口の脇に立ち長い沈黙が終わるその時を待っていた。

「ワタシ判った気がした。あの子も殉と同じなんだって。都合良すぎるよね」

「都合がいい？」

「だってそうじゃない。口もきけずふさぎ込んでたワタシの前に現れたのがあなた、嫌われ者の暴力女になったワタシに怖がらず近づいてきたのがあの子。出来すぎてるわ。安っぽい小説みたい」

「君はみーちゃんも、僕みたいにいやらしい奴だと思うのか？ 他人の心に土足で踏み込む覗き屋だと」

加夏子が小さく首を振る。

「不思議だった。何であの子といると穏やかな気分になるのか判らなかった。ワタシひとりっ子だから知らなかったけど、妹がいるってこういう事なのかなって。当たり前のようにワタシを受け入れてくれる存在、でも親とも友達とも恋人とも違う。兄弟とか姉妹って、きっとこんなものなんでしょうね」

「僕にも兄さんがいる」

「そう」

感心無さげに、加夏子は殉の言葉を流してみせた。

「あの子にも力があるなら、ワタシをそんな気分にするのなんて簡単だったでしょうね。あなたもそうだった。ワタシにいろんな夢を見させてくれた。でも全部嘘、見せかけの飾り物でしかなかった」

「それは違う」

「どう違うってゆうのよ」

思わず前に踏み出した殉を、クルリと車椅子を回した加夏子が真正面から睨んだ。

「知らないって事が…知らなかったって事が、どれだけみじめで怖くて情け無くて、それから腹立たしい事が、あなたに判る？ 目が覚めてからずっとよ、顔を見れば誰もかれも隠し事をしてる、口ではいい事ばかり言って、目の奥に違う光がある。ワタシが睨むとみんな目線を外す、口ごもる、嘘つきだらけだった！」

加夏子の表情が、またあの狂気の老婆に変わろうとしていた。

「だまそうってそうはいくか！ ワタシは…アタシはもう誰にも騙されない！ ダレにも傷なんかつけさせない！ アタシは、アタシは！！！」

加夏子の右手が机の鏡を掴むと、高々と振り上げた。

◇

バッキャアアアーン！！

ガラスの碎け散る音が夜の住宅街に響き渡った。

「あなたっ！」

紗季子が叫ぶ。

恒彦の巨体がソファをに蹴り飛ばし、階段を踏み抜く勢いで二階へ駆け上がった。

ドアノブをわしづかみにして一気に部屋へ飛び込もうとした、そのとき。

「いいよ、やれよ！ 遠慮しないでぶつけろよ！ ちゃんと見えてるよな、覗き屋のボクなんかと違ってみんな見えるんだろ？ やれよ！！」

ドア越しに聞こえてきた殉の罵声が、彼の手を止めた。

薄く開いた隙間から中の様子を伺う。

死角にいる二人の姿は見えなかったが、張りつめた緊迫感が漂ってきた。

もう1度、今度は陶器の割れるような音が響き、飛び散った破片が恒彦の足下にも飛んできた。

淡い空色の欠片。加夏子のお気に入りのペン立ての無惨な姿であった。

「どうした？ どうしてぶつけないんだ。僕にはよけられないんだぞ。僕が憎いんだろ？ 君を汚した僕が憎くてしょうがないんだろ！ 僕はここにいるぞ！！」

ガシャン！ ガシャンッ！！

車椅子のぶつかる音。

くぐもった殉の呻き声。

「わからない！ わからないんだよお！！ アタシなんにも覚えてないんだ、でもアンタがいるとキモいんだ！ ムカついて自分が止められないんだ！ 何とかして…なんとかしろよお！ 助けてよおお！！」

ドアを開けると、殉の胸ぐらを両手で握りしめ、鳩尾の辺りに額を埋めた加夏子が叫びながら泣いていた。

「カナちゃん…君の言う通りだ、みんな僕がいけないんだ。話してあげる、あの時僕が何を見て、君になにがあったのか」

殉がゆっくりとこちらを振り向いた。

瞬かない青い瞳から一筋、透明なしずくが滑り落ちるのを恒彦は見た。

彼はそっとドアを閉め、部屋を後にした。

階段の途中で心配そうに二階を見上げていた紗季子に、恒彦は声を掛けた。

「任そう、彼に。大丈夫だよ、きっと」

紗季子が小さく頷いた。